

英語の Let 使役構文の獲得について

On the Acquisition of the Let Causative Construction in English

本多 明子[†]

Akiko Honda

[†]神戸女子大学

Kobe Women's University

a-honda@yg.kobe-wu.ac.jp

概要

In the early stages of language acquisition, native English-speaking children's utterances contain the Let Causative Construction (LCC). This study presents the results of the survey of the most frequently occurring expressive forms of LCC, compares them with other related causative constructions from the viewpoint of Construction Grammar in cognitive linguistics, and presents the characteristics of LCC. The purpose of this study is to investigate what kind of expressive forms children use to utter two events, cause and effect, and to clarify the relationship between cognitive development and language acquisition.

キーワード：Let 使役構文の獲得，認知発達，構文文法

1. はじめに

認知言語学における文法理論である構文文法では、構文は、其々独自の意味と形式から成る文法における基本単位であり、言語は構文の集合であるとの考えに基づく (Lakoff (1987), Fillmore, Kay & O'Connor (1988); Goldberg (1995), (2006)). 構文文法では、構文には人間のものの見方が反映されているという考えに基づき、人がどのようにものごとを捉え、認識しているのかを構文研究により説明する。近年では、構文文法の進展に伴い、文法体系の中に存在する其々の構文が持つ特性、構文間の関係を捉えた構文継承や構文ネットワークの解明に加え、どのようなプロセスを経て構文の獲得に至るのかが明らかになってきている (Tomasello (2006), Ellis, Römer & O'Donnell (2016)).

英語の文法体系に属する構文に、使役を表す構文が存在する。使役構文とは、原因事象と結果事象の二つの事象を併せ持つ構文を指す。例えば、使役構文に属する構文に結果構文 (Resultative Construction (以後、RC) がある。RC はその特徴として、原因と結果の二つの事象を一つの形式で表す (例。She washed her car clean.)。他にも、動詞の make を伴う使役構文 (Make Causative Construction (MCC), 例。The child made his glasses shiny.) が存在する。言語獲得の観点から見ると、MCC は言語獲得初期段階の子どもの発話で頻度が高い一方で、RC

の使用頻度は MCC に比べると高くない。獲得上の構文間差異の要因の一つとして、拙論 (2022) では RC と MCC の構文特性の違いによることを提案した。即ち、原因を動詞の行為に帰するのか、それともそれを主語の指示対象に帰するのかによることを示した。この点をさらに検証することが必要である。

2. 目的

本研究は、RC や MCC 以外に因果関係の事象を子どもがどのような言語形式を用いて発話しているのかを調査し、認知言語学、構文文法の観点からこれらの構文特性とも比較しながら、認知発達と言語獲得の関連性を探究することを目的とする。

3. 方法

発話データベースの CHILDES を用いて英語を母語とする2名の子どもの対象に、使役構文の使用について、特に言語獲得初期段階に使用頻度が高い構文を調査し、その構文の意味構造的特性について考察した。それと同時に、当該構文の使用時期の子どもの認知発達について発達理論に基づいた分析を行った。

4. 結果と考察

本研究では、Lara (1歳9ヶ月から3歳3ヶ月までの全記録) と Thomas (2歳0ヶ月から4歳11ヶ月までの全記録) の発話から使役構文の調査を行った。その結果、(1)に見るような動詞 let を伴う構文 (以後、本論文の中では Let 使役構文 (Let Causative Construction (LCC と記す)) の使用頻度が高かった。

- (1) a. let me push it. (Lara, 2歳4ヶ月)
- b. let me have that ball. (Lara, 2歳6ヶ月)
- c. let me do roller skate like [?] that. (Thomas, 2歳8ヶ月)
- d. let me in [/] let me in. (Thomas, 2歳9ヶ月)

2名の子どもに共通していたのは、動詞 *let* を含む発話の中でも、特に、表現形式 [let me V] の発話頻度が半数以上を占めていたことである。例えば、Lara の発話では、[let me V] の出現率は動詞 *let* を含む発話全体の約 62.8% (152/242)、Thomas では約 56.1% (156/278) であった。表現形式 [let me V] 以外には、子どもは、例えば、V の位置に *through* や *out* などの副詞を、*me* の位置に話者以外を指す名詞や代名詞、固有名詞を使用していた。

- (2) a. *let me through.* (Lara, 2歳4ヶ月)
 b. *let Mitra out.* (Thomas, 2歳7ヶ月)

なぜ、LCC は子どもの発話で使用される頻度が高いのだろうか。その要因の一つとして、周りの大人からのインプットの頻度が考えられる。Lara の場合、LCC の使用が初めて見られたのが、2歳4ヶ月である (CHI: *let me push it*). この Lara の発話までに母親 (MOT) を含めた周りの大人の [let me V] の使用回数は 31 回であり、その中に動詞 *push* も含まれていた (MOT: *let me push it down first and then you can bang.* (Lara (2歳4ヶ月) に向けて)). 子どもに話しかける養育者からのインプットの頻度は、子どもの発話頻度に関与している可能性がある。しかしながら、実際には、周りの大人からのインプットがなくても子どもの発話にその表現形式が出現している事例がある。

- (3) a. *they knock the rattlesnakes dead.* (Kuczaj, 3歳5ヶ月)
 b. *and it didn't even crack my head open.* (Kuczaj, 4歳1ヶ月)

(3a)と(3b)は CHILDES より抽出した子ども Kuczaj の発話である。ここでは RC の表現形式 [Subj V Obj RP] が用いられている。Subj は Subject を、V は Verb を、Obj は Object を、RP は Resultative Phrase を示す。インプットの頻度について調べた結果、Kuczaj 以外の大人の発話の中に動詞の *knock* や *crack*、形容詞の *dead* や *open* はそれぞれ確認できたものの、それらが RC の形式に生じる発話はなかった。例えば、母親 (MOT) の発話 (Kuczaj 2歳4ヶ月から 5歳0ヶ月までの全記録) において、*knock* は 3 回、*dead* は 1 回、*crack* は 3 回、*open* は 13 回の使用であった。(4)はその一部である。丸括弧の月齢は、母親が発話した時の子どもの月齢を示す。

- (4) a. MOT: *knock (.) knock who's there?*

(Kuczaj, 3歳4ヶ月)

- b. MOT: *how can you tell it's dead?* (Kuczaj, 3歳6ヶ月)

- c. MOT: *you'll be able to crack them by yourself.* (Kuczaj, 2歳8ヶ月)

- d. MOT: *we'll go down there if it's open.* (Kuczaj, 2歳7ヶ月)

さらに、大人からのインプットの前に子どもの発話の中に RC の出現が確認された。

- (5) a. CHI: *somebody knocked the Lone_Ranger unconscious.* (Kuczaj, 5歳0ヶ月, line 734)
 b. MOT: *oh even though he was knocked unconscious.* (Kuczaj, 5歳0ヶ月, line 752)

丸括弧内の line はその発話が出た行を示す。その数字に見るように、子どもの発話の方が母親より先である。子どもを含めた発話者の全記録の中に *knock* と *unconscious* との結合は(4)以外に出現しなかった。

本研究では、インプット頻度の可能性以外に、LCC の意味構造的特性に着目する。先に見たように、子どもの発話において、*let* が含まれる表現形式全体のうち形式 [let me V] は半数以上を占めている。しかも、*let me* は音的に連結し、/lemi/と発音されることから、二語ではなく一語のように話され、実際に子ども自身も一語のように発音する。LCC の意味特性として注目すべき点は、LCC によって表される結果事象の直接的な原因は、主語 (Subj) によって言語化される指示対象にあるということである。目的語として言語化される指示対象は、主語の指示対象が許可してはじめて動詞(V)の行為を行うことができる。但し、LCC を用いた子どもの発話において、半数以上が主語を言語化していないが、CHILDES の発話データからもその指示対象は、子どもの発話の聞き手 (母親や周りの大人など) であることがわかる。結果事象の直接的な原因は主語の指示対象にあるという点は、MCC にも共通する。(6b)の例は Simpson (1983: 146)からの引用であり、*マークは文法構文として適格でないことを示す。

- (6) a. *Medusa made the hero stone by seeing it.*
 b. **Medusa saw the hero stone.*

(6a)はMCC、(6b)はRCである。両文の適格性について、拙論で述べたように、視覚にとらえたものを石の状態に変えるのは、動詞 *see* よって表される行為ではなく、

Medusa の力であり、その原因は主語にある。MCC は構文特性として、結果事象の直接的な原因を主語に帰すが、RC はその直接的な原因を動詞の行為に帰する。このような構文特性から、RC の獲得には、現実世界における一つひとつの経験を基盤にしながら、それぞれの結果事象がどのような行為事象と有機的に結び付いているのかを認識する必要がある。RC の使用時 (cf. (3a)) には、子どもはこのような RC の特性を認識しているといえる。

さらに注目すべきは、子どもの LCC の使用において動詞 *let* を含む文の半数以上で目的語の位置に子ども自らを言語化した代名詞の *me* が出現していたことである。この点については、子どもの認知発達に関係していると考えられる。Erik Homburger Erikson ((1950), (1983)) の提唱する心理社会的発達理論によると、LCC を話し始める 2 歳から 3 歳は発達段階では幼児期前期と呼ばれ、自我が芽生え何事も自分でやろうとする時期になる。もちろん、それぞれ個に応じた発達があるため、実際には時期的な差がある。この頃は、例えば、実際に子どもを観察していると、今までは周りの大人によって履かせてもらっていた靴を何とか自分で履こうとしたり、自分で洋服のボタンをはめようとしたりするようになる。大人から見ると時間はかかるが、その行為をなんとか自分で達成しようとする。そのような具体的な行為の一つひとつの経験が、自らの力で物事を達成しようとする原動力になっていると考えられる。Lara と Thomas の全発話から、人称代名詞の *I* と *me* の出現について調べた結果、2 歳前後からの使用が確認された。

- (7) a. I build xxx. (Lara, 1 歳 9 ヶ月)
 b. I did it. (Lara, 1 歳 11 ヶ月)
 c. I do throw. (Lara, 2 歳 0 ヶ月)
 d. I see you. (Thomas, 2 歳 2 ヶ月)
 e. I think it's just [/] just the noise you're making. (Thomas, 2 歳 3 ヶ月)
 f. I can. (Thomas, 2 歳 3 ヶ月)
- (8) a. take your bottle out and tell me what you said. (Lara, 1 歳 10 ヶ月)
 b. do it for me. (Lara, 2 歳 2 ヶ月)
 c. watch me. (Lara, 2 歳 5 ヶ月)
 d. two spoons for me. (Thomas, 2 歳 0 ヶ月)
 e. look at me. (Thomas, 2 歳 0 ヶ月)
 f. show me. (Thomas, 2 歳 5 ヶ月)

言語形式 [*let me V*] の使用頻度が 2 歳頃から高まるのは、子どもの認知発達とも関係していると考えられる。

5. おわりに

使役構文の獲得プロセスは、因果関係における結果事象の直接的な原因が主語によって言語化される指示対象にある構文からその原因を動詞によって表される行為に帰す構文の獲得へと段階を経ることが示された。使役構文の獲得には、其々の構文特性と子どもの認知発達が関係していると考えられる。

謝辞

本論文の執筆にあたりまして、査読委員の先生方に大変貴重な御意見を賜りました。心より感謝申し上げます。本研究は JSPS 科研費 23K00583 の助成を受けたものです。

文献

- [1] Ellis, Nick C., Römer, Ute and O'Donnell, Matthew Brook. (2016) *Usage-Based Approaches to Language Acquisition and Processing: Cognitive and Corpus Investigations of Construction Grammar*, Oxford, Wiley.
- [2] Erikson, E H. and Erikson, J M. (1983) *The Life Cycle Completed*, W W Norton & Co.
- [3] Erikson, Erik. H. (1950) *Childhood and Society*, London, W W Norton & Co.
- [4] Fillmore, Charles. J., Paul Kay, and Mary Catherine O'Connor. (1988) Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of *Let Alone*, *Language* 64, 501-538.
- [5] Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago, University of Chicago Press.
- [6] Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work – The Nature of Generalization in Language*, Oxford, Oxford University Press.
- [7] Honda Akiko. (2022) 英語の使役構文の成立条件とその獲得について (Cognitive Constraints on Causative Constructions in English and Their Acquisition) 日本認知科学会第 39 回大会論文集.
- [8] Lakoff, George. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, Chicago, University of Chicago Press.
- [9] MacWhinney, B. (2000) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*. 3rd ed. Vol.2. *The Database*, Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- [10] Simpson, Jane (1983) "Resultatives", in L. Levin, M. Rappaport, and A. Zaenen, eds., *Papers in Lexical-Functional Grammar*, 143-157, Bloomington, Indiana University Linguistics Club.
- [11] Tomasello, Michael (2006) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*, Boston, Harvard University Press.